
窓と屋上

宮夢露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓と屋上

【Nコード】

N6326B

【作者名】

宮夢露

【あらすじ】

交通事故で、樹碧は入院することになった。そして、同じ病室にいた碧と出合う。しかし彼は誰とも話さず、顔も見せずといった不思議少年だった。しかし彼の顔を見てしまった樹碧は、碧に惹かれていく。だが彼には……。樹碧と碧、その他の視点からくりなす悲しく、叶わない恋話。

第一話 一室の一角 side 樹碧

私は、交通事故で入院している。

私が病院で過ごす部屋は、見通しが良く、春には、窓から少し下を覗けば大きな桜並木が見え、その奥には、広大に青い海が広がっている。

この世とは思えないほど幻想的な景色だと思う。

入院しときながら呑気なことを言ってる場合じゃないんですけどね。私こと、時雨 樹碧 15歳、の他にこの病室には3人の人が入院している。

1人は、私のことをレミと呼んでいて、私の良き同室者のお姉さん、芙蓉 可憐さん、21歳。芙蓉さんのベッドは私の隣。（私は窓側）2人目は、明るくて、いつも元気を分けてくれるお兄さんの、蒼龍 空さん、23歳。空さんのベッドは芙蓉さんの前。

そして3人目の人は、ちょっと変わり者で、病院の中で有名の澄那 碧さん、私の一つ年上で、16歳。私の前にベッドが置いてあるのだけれど……。一度も澄那碧さんの顔を見たことがないんです。他の2人も同じく、この病院で彼の顔を見たことがある人は看護婦の人や、ドクターの先生方だけらしい。ちなみに名前は病室の名札で解った。あア……見たいなア……顔。

そして彼は俗に言う、不思議少年である……。例えばベッドはいつもカーテンで仕切られているし、咳払い以外の声を出さないし、テレビも見ないし、話しかけても何の返答もないのである。数を挙げれば切りがな……。いや切りはあるけど、とにかく不思議なのだ。

私は小声で芙蓉さんに、

「ねーねー、芙蓉さん。あの澄那碧さんって人どんな感じなの？」と聞いていた。

「そうねエ……、私も顔を見たことは無いし、それに……って言うてもあまりあなた達と余り変わらない情報しか持ってないわ。」

「そーなのですか……。」

私はジッとカーテンが仕切られている一角を眺めていた。

夜何時くらいだろう。私はトイレに行きたくなって、ベットから抜け出し、廊下を歩いていると前からスリッパを履いた人の足音がした。

私は目を細めてよくみてみると、あの不思議少年が歩いてきた。

私はトイレに行く、と言う目的を忘れ、それ以上に彼と話をしてみたい、と思っていた。

彼は私の横を幽霊みたいにス〜っと歩いていった。そして私は咄嗟に、

「あのッ！」

彼は歩くのを止め、こちらに振り向いた。

彼は室内にかかわらず、深々と帽子を被り、マスクをしていて、顔は全く見えなかった。

そして彼は、

「何か用？」

と言った……、言った？………喋った！！！と心の中で喜んでいた。いやむしろそれより少し低い音程で、男前の声が聞こえた。……少し色っぽい……。

「用が無いなら行っていいい？」

彼は返事をしない私に声を掛けてきた。

「あッ！い、いえ……。あの…同じ部屋なのに顔を見たこともないなァ〜なんて……。」

私は少し恥じらいながら答えた。って何で恥じらってるの？

「それで？なに？」

え？！

「い、いえ……それ以外何も……。」

それを聞いた彼はあっそと呟き、病室に戻っていった。

あゝあ、折角お話出来たのにな〜。………ってか夜の病院………

コワッ！

次の日

芙蓉さんに昨日の出来事を話した。

「ウッソ！ホント！？あの子が喋ったの！！！？？」

もの凄く興味があつたのか、芙蓉さんは私のベットの入り込んで聞いてきた。

「そうなんですよ。顔見れなかったけど……。」

上出来よ！と興奮している芙蓉さんと私の元に空さんがやってきた。

「なぐんのおっはなっしかなア？俺も混ぜてよ。」

それを聞いた芙蓉さんが、昨日の私の武勇伝？を空さんに話してた。その話を隣で相槌をしながら聞いていたら、カーテンがピシャッと音を立てながら開いた。

澄那岐さんだ。

彼は、黙ってトコトコと廊下に出ていった。

「あれ？私のせい？」

「そんなことはないかと……。」

そして10分後、彼は雑誌を持って帰ってきた。

そこですかさず私が声を掛けた。

「あ、あの！」

彼は昨日と全く同じようにこっちに振り向く。

「さっき…、あの、騒いでて……すみませんでしたッ！」

私はペコリと頭を下げた。いや、私が騒いでいた訳でもないんだけど……。

「別に。」

とだけ言った彼はまたカーテンを閉めてしまった。閉まったのを確認して芙蓉さんが抱きついてきた。

「やっるじゃなくいいッ！あの子と口聞くなんて！」

「そうでしょうか？……私には……。」

芙蓉さんは不思議そうにこっちを見ている。

「なんでもないです。」

そう、私には彼から生きた心地が全く感じられなかった……。
まるで……。抜け殻の様……………。

第二話 問い続け・悪夢 side 碧

俺は全くとって人との関わりを避けていた。

なぜ？それはもうやだから。

なにが？それは人が死ぬのが。

なんで？言われなくても解るだろ。……怖くて、苦しいからだよ。

俺の家族はもう1人すら残っていない。俺以外の家族全員は俺の目の前で死んでいった。事故じゃない。

病気だ。

そしてその魔の手はどうとう、俺にまで回ってきたらしい。

病気の名前は知らない。つーか聞いてもない。しかしこの病気は珍しく、最近発病した最新の病気だそうだ。なので治療法は無い。症状は見た目は変わらず、痛みもない。がしっかりと体は弱っていく。そして余命の2ヶ月前くらいに症状が悪化し、急に辛くなる。体が言うことを聞かなくなる。

それは、父さんがそうだったから。そして母さんも……。これから俺も……。

そんな俺の余命だけは無理矢理聞き出した。

今は2月。

後、持って。

……10ヶ月……。……。（ってことは10月辺りで体が動かなくなっていくのか……。）

そう。

俺はもうちょっとで死ぬ。一年も持たずに。

この世ともお別れ。

この事実を知っているのは俺と俺の担当のドクターで、この病院の

若院長の刻谷 桐谷^{こくたに きりや}27歳。この人は俺に良くしてくれる。そもそも原因は、俺の家族全員の死に立ち寄った唯一の先生だからだ。別に頼んでもいない。先生が勝手にやらせてくれて言ったからだ。前まで俺は個室だった。しかし先生が個室よりはこっちの方がいいだろう。と言って俺は今の病室に居るわけだ。でもその病室にはまだ誰1人と患者が居なかった。

先生に聞くには、

「お前、年寄り嫌いだったろ？だから今度若い子が入ってきたらここにいれるんだよ。」

先生曰く、三十路以下だけの病室にする。…そうだ。

別に老人を嫌いと言った覚えは全くないのだが、俺は何の支障もないと思う、

「俺、この部屋でいいよ。だけど…一番窓際がいい。」

そんな容易いお願いは簡単に叶った。

ホントは個室の方がいいかなって思っていたが、別にどうでも良くなってきた。

そしてこの部屋には何人もの患者が入退院を繰り返していった。しかし俺は誰にも話しかけず、カーテンを閉め切っていた。そう。

俺はこの一室の一角にある、カーテンの中でこの心臓が止まるまで過ごすんだな、と本気で思っていた。

別にいい。

誰も悲しまない。

俺が死んだって。

いや、先生は泣いてくれるのだろうか？

看護婦の人も泣いてくれるのだろうか？

いや、俺なんか死んだとしても先生達は、泣かないだろう。

なにせ、今までどれだけの『死』に立ち会って来たことだろうか。

そう。俺はその中の1人として加わるだけなのだ。

そして俺は重くなった瞼を閉じた。

ふと気が付くと、目の前に誰かが立ってこっちを見ている。
その人は少し透けている様に見えて、まるで幽霊の様だった。
『泣いてくれる人が欲しいの?』
いきなり話しかけてきた。

「いや、そんなんじゃない…。」

『怖いの?』

「別に…………。」

『ホントに?』

「本当に…………。」

『じゃあ何が怖いのか?』

「だから怖いもんなんか…………。」

『人と話すのか?』

「違う…………。」

『人と触れ合うのか?』

「違う…………。」

『死ぬのか?』

「違うッ！怖くなんか無いッ！」

『怖いくせに……………』

「!!?!?!?!?!」

勢いよく起きあがった俺は無駄に息を乱しながら胸の奥の痛みを紛らわせる為に、左手は右肩に、右手は左肩を思い切り握った。

ほのかに肩に痛みが走ったが、胸の痛みも少しずつ治まってきた。しかしまだ息は乱れていた。

「ハアハアハア……、夢?……か。」

そうか、俺は寝てただけか。

あの夢のせいで俺の服はビッショリと汗で濡れていた。

俺は上着を脱ぎ、近くに掛けてあったタオルで体を拭き、その後に新しい上着を着て、再びベットに横たわる。

その夢はまるで俺を壊そうとしているかの様に、次から次へと問い続けてくる……………。

いったい……………。

頭が痛い。

まだ深夜だろうか、半月の月光がカーテンに仕切られてるベットを鈍く照らしていた。

ふと俺は、

「悪夢……………か……………」

と、呟いていた。

第三話 夜中の楽譜 side 樹碧

私は恐がりです。

はつきし言って、夜の病院とかホントに怖くて仕方ありません。なのに、かなりの高確率で私は夜中に目が覚めるてしまうんです。だけどいつも起きるたびに、澄那岐さんも起きているんです。

それになにかシャーペンか何かが机を擦る音が聞こえる。まさにテスト中に聞こえるカタカタといった感じに似ている音。ってか同じだけど。

そして私は自分の好奇心に耐えられず、気が付くと、彼のベットを仕切っていたカーテンを開けてしまっていた。

彼は机に向けていた頭をスーッと上げてこっちを向いた。

「何か用？」

……始めて顔を見た。

格好いい。

月の光が横顔を綺麗に輝かしている。

私は頬が少し赤くなってしまっていた。そしてその赤くなった頬を隠すように、両手で顔を覆った。

「ねエ、何か用なの？」

「あ、いや……何か物音がして……それで……気になって……。」「

「そっか、起こしちゃったか。悪かった。」「

私はさらに頬が熱くなつたの瞬間的に解った。

「い、いえ！私も元から起きてましたし……。」「

そして私は彼が机の上にある、紙に気が付いた。

「あ、あアこれ？楽譜だよ。」「

今始めて気が付いた。

彼ってホントは……かなり優しい？

「見る？」

私は彼の言葉で我が帰り、

「見てもいいんですか？」

と、言葉を口に出ることが出来た。

いいよと彼は言って、ベッドの脇にある椅子を指差した。座っているよの合図なのは見てすぐに解った。

「おじゃましまアゝす……。」

彼は小声でどうぞと言った。

「寒かったら布団貸すよ？」

「あ、大丈夫ですッ」

そして私は彼から楽譜を渡された。

「わアゝ、凄い。これ作ったんですか？」

私は始めてと言ってもいいほどじっくりと楽譜を見ていた。

「まあね。これね、その棚に入ってるギターで弾くんだよ。でも我ながら上手く出来ただけど、まだギターでは弾けてないんだよね、アハハ。」

そして情けないな、と言って苦笑いしていた。

「あの、澄那岐さん？」

「ああ、碧でいいよ。」

「あ、じゃあ……。碧さん……で……。」

私はまた顔がカーッと赤くなったのは言うまでもない。

「さんじゃなくて君でもいいけど？」

私が言いにくい様に言っただろうか、優しく彼は言ってくれた。

「あ、まだ君の名前聞いてなかったよね？」

私はあたふたしながら、

「わひゃひ……。……。」

咄嗟に声を出した。が、囁んでしまった……。……。

そして彼はクスクスと少し可愛らしく笑った。

「なに緊張してんの？面白いなアゝ。キミって。」

まだクスクス笑っている。

私はさらに恥ずかしくなった。

笑い終わったのか彼がまた聞いてきた。

「名前。教えて？」

私は落ち着きを取り戻し、

「時雨 樹碧って言います。樹碧って言う字は難しい方の『き』でみどりは……あ、碧くんの字と同じですね。」

「そうなんだ。この漢字ってあまり使われてないから、ちょっと驚いた。」

そして最後に、よろしくと言って碧君はにっこりと笑った。

しかし……その笑った顔は前にも感じた、一見暖かそうに見えるのとは裏腹に、彼の瞳は……内側から凍り付くような、恐ろしく、冷めていた……。

しかしそれはほんの些細なことで、よく見なければ気付かないほどだった。

第四話 空の下 side 碧

今まで極力人と関わらないようにしていた。

だが、彼女が現れた。

彼女が入院してかれこれ1週間が経とうとしている…。

彼女こと、時雨 樹碧は、俺に唯一近づいてきた人だった。ほかの人は気味悪がって近寄らない。

時雨は廊下で声を掛けてきたり、いきなり俺のベッドを囲んでいるカーテンを開いたり、彼女は想像もしないようなことをしでかしてくる。

それをきっかけに、俺は時雨とよく話すようになった。

時雨からの紹介で、同室の芙蓉さん、蒼龍さんとも話すことが出来た。

俺の担当の医者。桐谷さんも、最近俺が明るくなったと言っている。それに時雨は俺に二つ条件を出してきた。

一つ目は、帽子とマスクを外すこと。

そして俺の素顔を見た芙蓉さんが可愛い、と言いながら抱きついてきたりと、色々あったが、自分でも息苦しくなくてなんとなく清々しいと思う。

そしてもう一つは、俺のベッドを仕切っているカーテンを寝るとき以外は開けること。

この二つの条件を俺は呑むことにした。

理由？そんなの無い。そう、ただ何となく…。

この条件とは別に俺は一日の日課に一つ付け加えた。

それは、

一日一回は、空の下に出ること。

早速俺は屋上に行くことにした。

屋上には、ベットで使われていたシーツなどが干してある。

そのほかに木製のベンチが幾つか在って。その幾つかあるベンチの中で一番屋上の入り口から一番遠いベンチが、俺のお気に入りだ。
だ。

その席からは、正面に大きな海がよく見える。そしてその海から仄かに潮風流れ込んできたり、カモメの鳴き声が聞こえたりもする。でも流石に潮風は冷たかった。

なにせ季節は今、冬と春の中間の3月上旬……。

屋上に来ていることは誰1人と知っている人は居ない。

何故なら屋上に来る時間帯は、みんな眠っているから。

人に教える気もないし、知られたくもない。

だって、ここが……。

気が付くと俺はベンチで眠ってしまっていた。

たまに着けている腕時計見ていると、既に朝食の時間をとくに過ぎていた。

帰ったら時雨達に怒られるだろうな……。

その前に看護婦に怒られるか。

ふと、その時誰かが屋上のドアを開けた音がした。

だが、干されているシーツでドアは見えない。

足音が徐々に俺の方に近寄ってくる。

俺は気にもしないで、再び海に目を向けた。

「あのオ……。」

俺の後ろから女の子の声がした。

「ん？」

俺は振り向きもせずに答えた。

「隣、いいですか？」

未だ振り向かない俺に緊張しながら質問してきた。

「どうぞ。」

俺が答えるとベンチからキシと軋んだ音が聞こえた。

「ここで何を？」

「海、眺めてただけだよ。」

俺は少し笑いながら答えた。

女の子もこの景色を眺めに来たのだろうか？

しかし今までここには俺以外来る人を見たことがない。

「君は？ここに何しに？」

俺は始めて隣に座っている女の子の顔を見た。

綺麗な顔立ち、大きく、クリツとした瞳、黒混じりの茶髪の長い髪の毛。

思えば俺は樹碧の顔をちゃんと見た覚えがない。今度見てみよう…。

「私は昨日入院したんです。」

「そっか。」

「えー！なんで理由聞かないんですかア!？」

なんだ？急にさっきまでの雰囲気が変わった？

「理由を聞いても答える事は一つだから。」

女の子は、ムツと口を膨らませた。

なるほど。近づく為の演技か、さっきのは。そして今がこの子の本性。

「それでも聞いてくれるのが優しさなんじゃないですか？」

「それが逆に相手を傷つける事になるかもしれない。」

「あ……。」

彼女は少し落ち込んだ様に顔を沈めた。

「悪かったね、ちよっときつく言い過ぎた。」

俺の言ったことが嬉しかったのか、彼女の顔が明るくなった。

「こっちこそ。あ、」

彼女は何かを思いだしたようだ。

「名前、教えてくれませんか？」

なんだ、そんなことか。

「澄那岐 碧。適当に呼んでいいよ。」

「碧さんかア…。言い名前…。」

言い名前って…。色だぞ？

「あ、私は桜花^{おうか} 奈緒^{なお}です。私のことは出来れば奈緒ちゃんです。」

「じゃあ、桜花さんで。」

「ううゝ、意地悪うゝ。」

彼女の膨れっ面を見たら可笑しくなった。

「なに笑ってるんですかア。」

桜花さんの話し方は独特だ。

語尾の殆どを伸ばす。

ちよっと間拔けに聞こえるぞ。オイ。

「んじゃ、俺行くわ。」

「もう行っちゃうんですかア？」

何が不満なんだ？

「俺、朝飯とか食べてないから同室の人に怒られそうで。」

そっか、と溜め息を付いて、

「今度はいつここに来ますか？」

「俺は七時にはここに来るな。」

「ひええゝ。早起きなんですネ。って、今までここにいたんだ…。」

」

不意に答えてしまったが、何故そんなことを聞く？まさか…。

「それじゃ、私も毎日七時に来ますねッ！」

デジャブ…。

俺はゆっくりとドアを開け、階段を降り始めた。

あいつ等、怒ってるだろうな…。何て言い訳をしようか…。

第五話 夕日の音色 side 樹碧

もう……。

眼を覚まして勇気を出して碧くんにおはようって言に行っただのに……。

なんでもう居ないのよ！

勢いよく机を叩いてしまった。

「どうした?! 何事や!」

起こしちゃった……。

しかし芙蓉さんは大きな音にも気付かず、未だ眠り続けている。

「どうしたんだよ、樹碧ちゃん。」

蒼龍さんはベットから心配そうな顔をしてこっちを見ていた。

「あ、い……いえ、何でもないんです。起こしてすみません。」

と言って、頭を下げた。

「そっか、いよいよ気にしないから。んじゃもう一眠り。」

「もう朝食時間ですよ?」

蒼龍さんは朝食のことを思い出し、バツと上半身を起こした。

私も碧くんを待つついでに朝食を待つことにした。

しかし朝食を食べ終わっても碧くんは戻っては来なかった。

時刻はそろそろ9時を廻る。

探しに行ってみますか。

何処にいるかな、と考えつつドアの前に立つ。

「待ってれば来んだろ。」

振り向くと、後ろに蒼龍さんがご飯を食べながら話しかけてきた。

「何で分かるんですか?」

「勘だよカ・ン。」

勘……。

「いや、でも心配だから探しに行ってみます。」

「なにか？碧のこと好きなんか？」

「んなッ！」

私の顔がどんどん熱くなっていく。

「ちち、ちが…違いますッ！」

あたふたと、手取り足取り説明している私に蒼龍さんは大爆笑した。

「アハハ！クッククク…あゝハラ痛エゝ。無理せんでもいいよ。樹碧ちゃんの気持ち分かったからさ。」

私はドアの前で立ち尽したまま赤くなっていた。

ガラッ

後ろのドアが開いた。

振り向くと…。

「あ。」

碧くんだった。

スラッと背が高い。180あるかないか位。目の少し下位まで伸びたサラサラな髪の毛。綺麗な顔立ち。多分この顔で口説かれたら間違いない女の子は落ちるかもしれない…。

「えっと。ちょっといい？通りたいんだけど…。」

碧くんの顔を見て、見とれてしまった恥ずかしさで私の顔はさらに熱くなっていく。

「大丈夫？顔赤いぞ。」

「もう…、知らないッ！」

そう言っただけで私は自分のベットの間に頭を隠すように潜り込んだ。

「どうしちゃったんです？」

多分碧くんが蒼龍さんに聞いているのだろう。

お願い、ホントのことを言わないで！

「お年頃ってやつだよ。」

「ハア…。」

よく分からん、と小声で言った後ベットの軋む音がした。

お昼ごはんを食べた後から記憶がない。
寝ちゃったんだ。

外からは、夕日が差し込んでいて、窓から見える海は仄かに赤に染まっていた。

辺りを見渡すと、芙蓉さんと蒼龍さんのベットはカーテンが仕切られており、寝息が聞こえて来る。

碧くんのベットはカーテンが開いており、勿論碧くんの姿は見られない。

探しに行ってみますか。

そっとドアノブに手を掛けてドアを開ける。

廊下は窓から差し込む夕日で真っ赤に染まっていた。

私は病院中を歩き回った。

何故かいつもより廊下が広く感じれる。

碧くんが行きそうな場所を探し回って、気が付くと私は屋上に登る階段の前に立っていた。

残る場所はここだけ……。

ゆっくりと、ゆっくりと、私は会談を登っていく。

登る度に誰かの歌声が聞こえてきた。

優しい、それでいて暖かい歌。

アコースティックギターの音色に乗せて男の人のテノール声。

このドアを開けたら誰だか分かるの？

このドアを開けたら顔を見れるの？

このドアを開けたら……。

キー……とドアが軋む。

逆光が眩しくて目を開けていられなかった。

逆光から眼を両腕で隠し、再び瞼を開く。

眼に最初に入ったのは潮風に仰がれる白いシートだった。

その仰がれるシートの隙間には、ベンチに座った男の人の背中が見

えた。

しかし、歌は既に終わっていた。

あの人が…歌を……。

今までにも聞いたことがないような綺麗な声。
もう一回、聞きたい。

私は近寄り、声を掛ける。

「あの……。」

声を掛けても振り向かずに、

「なに？」

とだけ答える。

聞いたことがある声……。

「歌。上手いですね。」

また振り向かずに、ありがとう、と言った。

「…なあ、時雨。何でここが分かったんだ？」

時雨。私の名前。何でこの人が知ってるの？

「ま、いっか。」

立ち上がりこちらを振り向いたのは……。

澄那岐 碧だった…。

第六話 友達と呼べる人 side 碧

時雨はベットに潜り込んでしまった。

訳が分からない。

ドアを開けたら目の前には時雨が立っていて、「通りたんだけど…。」と言うと顔を赤くして、

「知らないッ！」

と言ってベットに潜り込んでしまった。

…なにをだよ……。

看護婦の人に何で朝食の時間にいなかったの？と怒られると思ったが誰もなんとも言ってこなかった。

そのおかげで難なく昼食を食べることが出来た。

昼食を食べ終わり、早速楽譜に目を通す。

自分で作つときながら未だにこの曲を弾けないでいる。

歌詞は全て覚えた。

メロディも覚えた。

後は、ギターだけ。

気が付くと部屋中から寝息が聞こえてきた。

そんな寝息がする中、俺は音を出来るだけ立てずにギターケースを取り出してドアを開けた。

廊下に出ると、海の方角からの赤い夕日が眩しい。

エレベーターに乗り、最上階に。

そして屋上への階段を登る。

開けるといつも軋むドアを押す。

途端に海からの潮風が全身にぶつかる。

さて…。

いつものベンチに座り、ギターケースを開ける。

風で飛ばされないように、楽譜はギターケースに見えるように置いた。

ギターを弾く。

ポロロンと柔らかな音色が聞こえる。

潮風が弱まってきた。

それと同時に、メロディをギターで弾く。

息を大きく吸い、歌い出す…。

サビに入り、声音も大きくする。

そしてラストパート…。

歌を歌い終わったのと同時に屋上のドアの開く音がした。

風で仰がれるシーツの音で足音が聞こえなくなった。

少し間があった。

「あの……。」

この声……。

時雨…か…。

「なに？」

「歌。上手いですね。」

そっか…。

「…なあ、時雨。何でここが分かったんだ？」

誰にも教えてないんだけどな…。

「ま、いっか。」

うんしょ、と聞こえないくらい小声で言っ立ち上がり振り返る。

そこには驚いたような顔をしている時雨が居た。

俺は驚いている時雨に微笑みかける。

それを見た時雨も微笑む…。

「いつも居ないと思ったらこんな場所に居たんだ。」

時雨は笑いながら階段を下りていく。

「あそこは人がいないからな。静かでいい。……朝を除いて……」

「なんで朝なの？」

不思議そうに時雨は聞いてきた。

「一人だけ見つかったんだよ。今日入院してきた子らしいんだけどな。」

別にいいか。

「もっと聞きたかったなあ。」

「まだ下手だけどね。」

「そんなことなかったんじゃない？」

そんな談話をしながら病室に戻る。

そこには笑いながら話している蒼龍さんと、芙蓉さんがいた。お帰り、と声をかけてくる。

俺はお帰り、と言われたのはかなり久しぶりだった。

家はない。家族は一人もいない。もちろん友達もいなかった。だが、

少なくとも今だけは、

「なにボクッと突っ立てんのよ。」

「おい澄那岐。はやくこっちこいよ。」

「碧くん、はやく。ね？」

友達がいる……。

第七話 退院・親友 side 樹碧

私が入院してから既に2ヶ月経とうとしている。
事故の怪我はもう殆ど治ってきている。
そしてはれて私も退院することが出来る。

「退院おめでとおう。レミは治るの速いのかね。」

「退院したら高校生活がまた始まるんだろ？青春してきな。」
「退院おめでとう。」

同じ病室の人たちから祝いの言葉を貰った。
芙蓉さんは来週。
蒼龍さんは明後日に退院らしい。

だけど、やはり碧くんは退院しないらしい。
碧くんってなんの病気なんだろう…。

その好奇心を心の中に閉まって私はこの病院を後にした。

「ちょっと、退院早々にぼけーっとしてるのよ！」

退院して次の日、私は学校に出ることになった。

そして私の隣で説教してくる女の子は春日^{かすが} 藍ちゃん^{あい}。

「退院早々説教しないで大丈夫？の一言くらいかけてよ。」

「あんたはねー…。まいつか。そういえば樹碧なんか変わったよね？」

「変わった……？」

「そうかな。私はそんなことないと思うよ？」

「何で疑問系なのよ…。」

藍ちゃんは、私と幼稚園から一緒だった。私の良き親友だと思う。

「あんた……。男が出来た？」

「え！？違うわよ！」

いきなり変なことを言われて私は動揺してしまった…。

「ふうん…。成る程ね。あんたはすぐに表に出すから解りやすいんだよね。」

藍ちゃんはすぐにこうやって私をからかう…。

「藍ちゃんの意地悪…。」

「それで？その好きな人は何組？」

この学校には居ない…。それ以前に学校にすら入っていない。

「学校の人じゃない…。」

「マジ！？それじゃ何？年上？まさか…病院のせんせ？」

「それは違う。」

藍ちゃんは腕を組んで考えている。

藍ちゃんには話した方がいいのかな？

いつも私は藍ちゃんに色々と助けて貰ってる。

「よし！それじゃ今度会いに行こう！」

「ちょ！？ええ！駄目だよ！絶対に！」

とにかく私は拒否しておく。

だって碧くんに迷惑だと思うし…、それに今行ったら芙蓉さん達にからかわれるだけだもん…。

「何でよく。いいじゃん、どんな人かくらい。あ、そういえばその人って年いくつ？」

「16歳…。」

「一個上かあ…。って高校入ってないの！？」

そういえばそうだ。碧くんはいつから入院しているんだろう？

「わかんないけどずっと入院してるのかな？」

そういえば私は碧くんのことを全然知らなかった…。

「そんなことはどうでもいいの！とにかく今度空いてる日教えてよね。」

勝手に藍ちゃんに約束をされてしまった…。

そしてあつという間に約束の日。
約束の日には既に芙蓉さんと蒼龍さんが退院している日を選んだ。
退院する前に二人には会っているので心配はない。

「樹碧〜！」

遠くから藍ちゃんの声が聞こえた。

待ち合わせ場所は病院の前にあるバス停。

「3分遅刻。」

こうみえても私は時間にはうるさい方。朝は弱いけど…。

「ごつめ〜ん。髪セットするのに時間掛かっちゃったよ。」

私もそれなりにオシャレをしてきたつもり。

多分かわいい？と思う…。自分で言うのもなんだけど…。

「それにしても今日は随分と気合い入れてますね〜、樹碧さん。」

からかう様にファッションチェックをしてくる藍ちゃん…。

「そんなのはどーでもいいでしょ！置いてくよっ！」

「ちよつと〜、怒らないでよ〜。」

隣では楽しそうに笑いながら歩いている藍ちゃんが居る。

そんなに碧くんと会うのが楽しみなのだろうか？

だけど私の方はかなり緊張していた。

だって…2週間ぶりに碧くんと会うんだもん…。

何から言えば良いんだろ…。

第八話 窓からの桜並木 side 碧

時雨が退院して早2週間が経つ。

そして芙蓉さんに蒼龍さんも退院していった。

そしてまた俺は一人になった。

「先生…やっぱり俺、個室にするわ。」

刻谷先生に相談し、俺は今まで過ごした病室の隣にある個室にして貰った。

個室はなにかと不便。だが、やっぱり人の気を遣わなくていい。

季節は4月中旬。

窓からは桜並木が明るく咲き誇っている。

その桜を見に、入院している人の殆どは散歩に行ったりする。

一方俺は、個室のベッドの上からその風景を眺めている。

看護婦さんに車椅子を押して貰っている人。

はたまた、家族の人に押して貰っている人。

車椅子ではなく、松葉杖をついてる人も居る。

そんな風景を見ていると少し心が痛い。

何故…？

病気のせい…？

それ以外の何か…？

それを今の俺には理解が出来ない。

コンコンとドアを叩く音がした。

「おい、澄那岐。たまには気分転換に『永久の坂』にでも散歩に行ってくればいいんじゃないか？」

『永久の坂』とは、あの桜並木の名称らしい。

「いや、俺は見てるだけで十分です。」

窓の外をずっと眺めている俺に先生は溜息を吐いた。
行け、と言っている様なものだ。

「解りました…。少し散歩に行くことにします。」

そう言うのと、先生はそうか、と呟き部屋を後にした。

この桜並木は窓から見るのと間近で見るとでは格別に違った。
俺は桜並木の中で一番大きな桜の木の根本に腰を下ろした。

なんとなく前を見るとこっちをチラチラ見てくる女の人何人か目につく。

何か変なことを俺がしているわけでもない。
でも俺はあえて気にしないで居た。

すると女の人が近寄ってきて、俺の前で立ち止まった。

見上げるとそこには桜花さんが立っていた。

桜花さんとは初めて会ってからよく、俺がギターの練習をしているときに屋上にやってきていた。

しかしそれ以外の場所では会ったことが一度もない。

「屋上以外の場所で会うのは初めてですねえ。」

「そうだな。」

うんしょ、と言いながら俺の隣に座る。

「潮風が気持ちいいですねえ。」

「ああ。」

「私もそろそろ退院なんですよ。」

「そうか。」

「碧さん…聞いてますか？」

「そうだな。」

ペシ、全然痛くないが頭を叩かれた。

「ちゃんと聞いてください！」

「すまない…。」

確かに今のは俺が悪かったな…。

「お祝いの一言くらい言ってくださいよお。」

「おめでと。」

「少ないですよお！」

こうしてみると、桜花さんは可愛い。

怒っている顔が可愛い。

別に恋いをしているわけではない。

正直にそう思っただけ…。

「…………あまりジロジロ私を見ないでくださいよお…。」

気がつくと桜花さんは体育座りで膝に顔を埋くめている。

長い髪の毛で顔は見えなかった。

俺は一人立ち上がり、

「俺、もう行くな？」

「ハイ♪」

いつもそうだった…。

桜花さんは俺を見付けるとすぐに近寄ってくるが、俺が何処か他の場所に移動しようとしても付いては来ない。

「それじゃ退院するときに呼べよ。」

その一言で驚いたのか、桜花さんは凄く嬉しそうだった。

俺は桜花さんに背を向けて、微笑んだ。

第九話 一目惚れ side 樹碧&藍

藍ちゃんと一緒に碧くんに会いに来たまでは良かった…。
しかし私が入院していた部屋には碧くんはもう居なかった。

「もう退院しちゃったのかな…。」

「そうかもねえ。」

でももう少しだけ探してみることにした。

藍ちゃんは碧くんよりもこの大きな病院に興味があったのか別行動
することになった。

「それじゃ！私は冒険に行ってくるよーん。」

そう言っただけ探してみることになった。

碧くんを捜している内にかなり時間が経っていた。

やはり碧くんは退院したのだろうか…。

碧くんを捜すのを止め、私は藍ちゃんを捜すことにした。

「あちゃー…。迷ってしまったのだ…。」

私は樹碧と別行動したは良いけど…この病院は大きすぎて迷ってしま
った。

地図らしきものはないし…とは言っても人に聞くのはちよびつと
恥ずかしい…。

ん…どうしたものか…。

「どうしたんですか？」

後ろから不意打ちの様に男の人の声が聞こえた。

振り返るとそこには格好いい男の人が立っていた。

「えーっと…そのちよつと散歩を…。」

「眼が泳いでるけど？」

ビクッ

この人…鋭い…。

「解ってる。案内するよ。」

助かったァ。

私の斜め前を歩く男の子。

私より頭一つ分くらい大きくて、格好良い。

年は私と同じくらい…だと思う。

それにしても…これが…一目惚れと言うものだろう…。

私は名前すら知らない男の子に恋をした…。

「そう言えば…名前教えて貰っても？」

「あ、私は藍です。春日藍。」

「そっか、藍さんか。俺は澄那岐碧。よろしく。」

澄那岐くんはニッコリ笑いかけてくれた。

「この病院に入院してるんですか？」

もう少し…澄那岐くんのことを知りたい…。

私の中で欲望が生まれた。

「そうだけど…そろそろ仮退院出来るかも。」

何の病気だったんだろう…いや、怪我かもしれない。

でも流石にこれは失礼だから聞かなかった。

「さて、着いたよ。」

あっという間に病院の正面玄関に着いてしまった。

「あ…ありがとうございます。」

「いや、俺も楽しかった。…それじゃ。」

そう言って澄那岐くんは来た道を再び戻って行った。
ボーッとしている私の後ろから樹碧の声が聞こえた。

「何処行ってたの？探したんだよ！」

「ゴメンゴメン。ちょっと迷っちゃっただけ。
その日…私はいつもより上機嫌だった。」

また…

会えるかな…？

第十話 手紙 side 碧

「ホントに来てくれたんですか!？」

今俺は、桜花さんの退院を見送っている。

桜花さんが病院に居た理由はただ風邪を拗らせただけだったらしい。

「あア。退院おめでとう。これからも元気で。」

そう言っただけ俺は手を差し出した。

桜花さんは少し顔を赤くして、俺の手を取る。

「これからも…って、もう会わないみたいじゃないですか!私はいくらも元気なのに。」

「そうだな、また会えたらな。」

桜花さんはニッコリ笑い、

「いつかお見舞い来ますから!それじゃまた会いましょうね!」

と言いつつ家族の元に走っていった。

俺は桜花さんが車に乗り、姿が見えなくなるまで見送っていた。

「また…会いましょう…か…。」

「ホントに大丈夫なんだな?何かあったらすぐに電話するんだぞ?

たまには俺も顔を見せるからな?」

こんな心配性に聞いてくる人は刻谷先生。

何故こんなにしつこく聞いてくる理由は、俺が仮退院するからだ。

俺は大丈夫ですよ、と言いつつ聞かせようやく刻谷先生から解放された。

心配してくれるのは素直に嬉しい。

ただこれ以上俺と関わりを持って欲しくなかった。

理由は簡単。

俺以外にも刻谷先生には、患者は山と居るからだ。

俺にだけ構っていると他の患者を診る時間が無くなってしまう。

それが嫌だった。

俺だけのため、他の人に何かあったら嫌だから…。

「解りましたね？俺はもう大丈夫です。家にも来ないでくださいよ？」

「ホントに大丈夫なの…」

「解りましたよね！？」

「ハイ…。」

まるでどっちが年上なのか解らなくなる様な会話を終え、俺は一人家に向かった。

本音は家になんか帰りたくなかった。

まだ病院に居た方が幸せだった。

誰だってそう思うだろう。

だって家には誰一人として居ないのだから…。

家に着いた俺は玄関のドアの鍵を開ける。

ガチャ

この音と共に俺はドアを開ける。

「ただいま。」

家に誰か居るわけでもないのに呼びかけるように口にする。

『おかえり。』と言葉を返してくれる筈がないのに…。

さて…

家は普通の一軒家で、家賃は払い終わっている。

一応親は金持ちに属していたが、家はこのままが良いと言っていたからリホームすらしなかった。

通帳にもまだお金は沢山ある。

普通に過ごしたら遊んでいても暮らせるぐらいのお金…。

もちろん遊んで暮らすつもりは微塵も無い。

何故かは俺にも解らない。

兎に角俺の両親が残してくれたお金はあまり使いたくなかっただけ…。

俺はその日何もしないまま一日を過ごした。

数日後…。

「これって…。」

そんな独り言と共に俺が手にしたもの…。

親からの『手紙』だった…。

震える手でなんとか中に入っている文章が書かれて居るであろう紙を取り出し、読み上げる。

「愛しい息子 碧へ

この手紙を碧が見付けてくれるかは解りません。

でも見付けてくれると信じ、私達は碧に手紙を送りました。

碧、元気になっていますか？私は多分『あっち』で元気になっています。

私は碧に三つ謝らないといけないよね？

一つ目は学校に行かせられなかったこと…。

二つ目は私とお父さんが碧の小さい頃に旅立ってしまったこと。

そして三つ目は…碧をそんな体に生んでしまったこと…。

ホントにゴメンね…。

でも…でも私は碧のことを愛しています。

死んでもずっと…ずっと…愛し続けています。

だから…生きること誇りを持って…生き続けてください。」

ここまでが一枚目…。

「私の自慢の息子、碧へ。

碧、お前には色々悪かった。

だがお前は私と紗英さえの自慢の息子だ。

私は紗英がお前を生んだ後、刻谷先生に呼ばれた。

その時、紗英とお前は不治の病に冒されていたことを聞かされた。
勿論、私も。

新種のウィルスと聞かされた時は私は泣くことしか出来なかった。
自分が死ぬことにじゃない…。

碧と紗英が死ぬことにだ…。

私は現実逃避したいと思っていた。

だが、紗英に「この子の名前…碧って言う名前はどうか？」と言われ
たとき、自分を取り戻した。

紗英が何故「青」や「蒼」と言う字ではなく「碧」を選んだのかは
私も解らない。

でも紗英のことだ。ちゃんとした理由が有ったのだろう。

だからお前の名前、お前自身に自信を持て。

私と紗英は先に待っているからな。

最後に一つ。

私たちは碧に、一つ償いをするべきだと思った。

碧の部屋に机が在るだろ？

その引き出しの中に封筒が入っている。
中を確認してくれ。

まだ大丈夫なはずだ。

愛しの、自慢の息子 碧。

私達は先に行って、待っているからな。

そして……私達を幼い笑顔で励ましてくれて……

本当に……有り難う。

碧の母と父。

紗英より

つかさ
司より」

第十話 手紙 side 碧（後書き）

とうとう十話まで書くことが出来ました。

何人からか、メッセージを受け取ったときは、本当に励みになりました。

だから、この小説の感想とかを書いてくれると助かります。

この小説を読んでいただいた人には本当に感謝しています。

これからも頑張っていきたいと思うので、どうぞ宜しくお願いします。

第十一話 転校生 side 樹碧

今日は学校だった。

朝から全校集会みたいなやつがあるんだって。

それで新学期からこの学校に入る先生や、転校生などを紹介するんだそうだ。

「今日の転校生、男の子らしいよ。」

何処からかそんな言葉が聞こえてくる。

男の子か……。

病院には碧くんが居なくなってたから、多分退院したんだろうけど……。

この学校に来たりして……。

「何にやけてんのよ!」

「キャッ!」

後ろから藍ちゃんが不意打ちしてきた。

「脅かさないでよぉ……。ビックリしたな。」

「アハハ。メンゴメンゴ。それで……何でにやけてたのかなぁ?」

「いや……その……。」

「ま、いっか。そういえば今日は転校生くるのかな?」

『転校生』の言葉に過剰反応してしまう……。

その転校生が碧くんはなはずが無いのに……。

「ね!?! 超格好良くなかった!?! さっきの子!」

「だよねー! ジャニーズか何かに入ってたとかありそうだったよね!」

へへ。今日の転校生ってそんなに格好いいんだ……。

「ハイ! みんな。今から集会だから廊下に並んで。」

この先生の声でクラスのみんなは廊下に並び出す。

「いこっか、藍ちゃん。」

「そだね。」

藍ちゃんは私の前に並んだ。

私より2日誕生日が早かったから。

「えー…。今日は少し暑いですが…。」

長い校長先生の話が始まった。

他の生徒達も退屈そうに聞いている。

聞いてない人は隣の男子と話していたり、後ろを向いて話している人だっている。

退屈だなく。

私は他の人になるべく見つからない様に伸びをする。

「次は新しく転校してきた人を紹介します。」

この声と共になにやらみんなが騒ぎ出した。

「ねーねー！あの子！格好良くない！？」

など聞こえてくる。

私は爪先立ちしてなんとか見ることが出来た。

転校生は全部で3人居た。

右から背の少し低い可愛い子。

真ん中の子は、右の子より少し背の大きい綺麗な子。

あれ……？

あの男の子…

まさ…か…ね？

目を凝らした私は驚愕した。

やっぱり…碧くんだ。

「それじゃ自己紹介して下さい。」

その声と共に右の子がマイクを手にした。

「私の名前は白菊^{しらぎく} 絢^{あや}です…。二年生に転入します…。これからも宜しく願います…。」

少し照れている姿は物凄く可愛かった。

あの子モテるだろうなあ…。

「私の名前は江野^{えの} 円^{まじか}です。三年に転入します。」

女の私から見ても円さんは格好良かった。

なんかちよつとだけ強気だろうなあ。

「それでは最後にキミ。自己紹介を。」

「ハイ。名前は澄那岐 碧。二年に転入します。宜しく。」

やっぱり…碧くんだ…。

私は藍ちゃんに教えてあげようと藍ちゃんの方を叩いた。

「え？ あ！ うん、何？」

「え…いや、前に病院に行ったとき探してた子…あの澄那岐くん…。」

「やっぱりね…。」

「え！ 何で！？ 何で解ったの！？」

「私前に病院で迷ったときに会ったよ。やっぱりあの人だったんだ。私も好きだなあ。」

ズキンッ

藍ちゃんも碧くんのが好き？

多分ここに居る女の子はみんな碧くんのこと…。

嫌…。

私は碧くんのが好き…。

みんなに取られたくない…。

自分勝手なのは自分でも解ってる…。

それでも…碧くんには私を見ていて欲しい…。

第十二話 学校 side 碧

手紙を読んだ俺は涙を流すことしか出来なかった…。

ハッキリ言って親と良い思い出の一つすら残っていない。

？

涙を拭った俺は、何か封筒にまだ入っていることに気が付いた。
そっとり出す。

それを見た俺はまた涙を流した…。

父さんと…母さんだ…。

それは写真だった。

その中には笑顔で赤ん坊の俺を抱き抱えている父さんと母さんが写っていた。

そっか…俺は勘違いしてたんだ…。

俺を産んだ。

だから父さん達が病気に掛かったから俺を恨んで居るんじゃないかと…。

でもそれは違かった…。

だって…この写真の中の父さん達…幸せそうだから…。

よし！

俺は初めてと言っても良い程の涙を拭くの袖で拭い、立ち上がった。
あの手紙に書いてあった。

償い…。

別に俺は父さん達を憎んでなんかいないんだよ…。

でも父さん達が最後に残した物なんだ。

それを絶対に無駄にはしたくない。

償いとしてじゃない。

親からのプレゼントとしてそれを受け取るんだ！

俺は自分の部屋を開け、机の真っ正面に立つ。

そして引き出しを開ける。

すると中には一通の封筒が置いてあった。

封筒を開ける。

すると中には何処かの電話番号が書いてある紙が入っていた。

その電話番号の下には「ここに電話してくれ。」と書いてあった。

俺は一階に向かって走り出す。

そして受話器を持ち、誰のかも解らない番号を入れていく…。

呼び出しが始まった。

少し俺は緊張している…。

ガチャ

出た！

『もしもし！この番号は碧くんかい！？』

すると受話器の向こうからは男の人の声が聞こえてきた。
俺を知っている…？

「ハイ…、でもなんで俺のこと…。」

『あア、驚かせてすまないね。僕は穂先^{ほさき} 薫^{かおる}だ。碧くんのこととは君の親から聞かされている。…そして一つの頼み事をされたんだよ。』

「父さん達からの…頼み事…？」

『そうだ。単刀直入に言うよ。その頼み事とはね…君を学校に入れてあげることなんだ。』

学校！？

「でも…俺勉強とか解らないんですけど…。」

『大丈夫、そのことは色々フォローはするよ。』

「それより薫さんに迷惑かけたくないですし…。」

『そんなことはない。ってゆーかこれは君のお父さん頼み事だからな…。』

そうだよな…。

これは父さんの頼み事なんだよな…。

でも大丈夫なのか…？

俺は今年中で死んでしまうかもしれない…。

そんな中で他人と関わる…。

『碧くんがもう長いくないことは僕も知っている……。だけど少しでも碧くんに普通の生活をして貰いたいんだ。』

「でも…。」

『大丈夫。周りに気を遣うことはないさ。』

正直…嬉しかった…。

俺も本当はもっと人と関わりたい…。

もっと話したい…。

もっともっと…普通に生活したい！

『行って…くれるかい？』

「……ハイ。」

『そうか。有り難う。これで碧くんのお父さんも喜んでくれるよ。』

それから数日後…

薫さんから制服や、その他諸々が送られてきた。

薫さんは俺と一緒に住まないかと誘ってくれたが俺は断った。
もう少し俺はこの家に居たかったから。

そして学校に行く日がやってきた。

何百人も人が居る前に俺は立たされ、自己紹介しろと言われた。

少し緊張したが、それ以上に俺はワクワクしていた。

これから普通の生活が出来ることに。

「碧くん、では改めて自己紹介して。」

朝、自己紹介を全校の前でさせられた後、俺は自分がこれから過ごす教室でまた自己紹介させられた。

そしてそのまま授業に入る。

勉強は前に少しだけやっていた。

それを応用したら、結構簡単にできた。

勉強って結構面白いかも…。

そしてあっという間に授業等が終わり、昼休みに。

あ、昼ご飯どうしよう…。

すると隣にいた女の子が俺に話しかけてきた。

これから食堂に行くので俺も誘ってくれたらしい。

友達が出来ないのでは、と心配していたが少し安心した。

みんなで食堂に歩いていく途中、色々質問された。

誕生日とか好きな物嫌いな物とか。

「好きな女の子のタイプは？」

急に一人の女の子が聞いてきた。

少し解らない…。

俺は人を好きになったことが無かったから…。

でも一つだけ…。

「笑顔がすてきな人かな。」

何故かというと、母さんがそうだったから…。

多分俺は母さんのことが好きだったんだと思う。

食堂に着いた。

俺は昔から和食しか食べなかったから魚の塩焼きセットってやつを頼んだ。

結構美味しかった。

病院のより美味いかも。

そして俺はみんなと別れ、一人で学校探索しに行った。

成る程…ここが一年生の教室か…。

「あの！」

俺がこの場を離れようとしたとき誰かに呼び止められた。
振り返ると…

そこには樹碧が立っていた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6326b/>

窓と屋上

2010年10月10日22時03分発行